Japanese Association for Religious Studies

（下川前掲論文）。このように、闇斎の「神」概念を「理」と捉えるか、「気」と捉えるか、という争論がある。しかし、その晩年大著である『文会筆録』に引かれる「神」に関する語を見ると、闇斎はやはり朱子学の「神」概念をそのまま継承して、「神」を、「鬼神」における「神」のように「気」と規定し、実体の意味で使う場合と、実体ではなく神妙な作用として使う場合とに分けている。更に神妙な作用としての「神」を、およそ「気」と考えられるものと、ほとんど「理」とされるようなものと捉えている。これに従えば、「神也者理之乗気而出入者也」の「神」の意味を「理」であるか、「気」であるかと単純に捉えることは無理があることが分かる。つまり、闇斎にとっての「神」は、「理」だけでもなく、「気」だけでもなく、「理」と「気」を兼ねたものである。

闇斎のこの「神」理解は、彼の神道論（神話解釈）にも投影されている。彼は、天御中主尊（国常立尊と同体異名）を本源の神、「化生万物」の唯一神として捉える。一方、彼はまた「惟神天地之心、惟人天下之神物、而其心則神明之舎」と述べ、「神」（この場合は神徳、神明）が万物に遍在し、また人間の心に宿るものであると解釈している。つまり、闇斎において「神」は二重の意味を持つ。すなわち、一つは実体としての「理」が備わる「気」（天神七代、地神五代、八百神）であり、もう一つは形而上の「理」に近い普遍的、本体的なもの（天地に充満する神徳、心に宿る神）である。

手島堵庵の思想と宗教体験

澤井　努

手島堵庵（一七一八―一七八六）に関する心学思想研究は、石田梅岩の思想研究に比べてその蓄積は少ない。その中でも、近年の高野秀晴氏による堵庵研究は示唆的である。彼によれば従来の心学研究は、梅岩を石門心学の創始者とみなしてきたために、心学の「創始者」である梅岩の思想が堵庵以降、どのように変化したのか（あるいはしなかったのか）を問題にしてきた。彼は梅岩と堵庵の「語り」に注目することで、両者の語りが異なる方向性を持っていたこと、すなわち、梅岩が「学問」を語ったのに対して、堵庵は「梅岩」を語ったことを指摘する。高野は「堵庵は梅岩の教えを批判的に乗り越えようと」しないし、その意味で堵庵の思想内容に「新しさは見出せない」と言う。堵庵に関する先行研究の少なさは、こうした高野の指摘と矛盾しない。

本発表では、こうした問題意識から、梅岩との関係を切り離して堵庵の心学思想を捉え直したい。具体的には、堵庵の思想と宗教体験の密接な連関を明らかにしたい。つまり、本研究は堵庵思想そのものの内在的考察である。

まず、堵庵の宗教体験を構造論的に考察することで、彼の到った心の位相を明らかにする。堵庵の「宗教体験」を「本心を知る」という位相へ到り、その位相を深めていく一連の体験であると理解した場合、次の五つの段階に分類できよう。まず、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

「己はこれいかなるものぞ〳〵」と修行する中で、あくまで理性的に「我即虚空」という人と世界との関係性を知る。その見地に対して、梅岩門下の斎藤全門から「虚空成我」が世界をどのように捉えるのかをさらに追及するように諭される。ここまでが第一段階に当る。続いて第二の段階として、全門の教導を基に工夫を続けていると、元文二（一七三七）年、入浴後に、浴衣を「きる着さす」という性に「微に通ずる所」があり、全門を再び訪ねたところ、頬を打たれる。この衝撃的な出来事によって「忽然」と「性の端」を悟る。その後、直ちに堵庵は梅岩を訪ね、自らの到った境地について語るが、「其知りたる性」（初性の端）を養うこととともに「見といふ病」を離れるように諭される。次に第三段階では、彼は仏説に裏づける形で、度重なる小さな気づき、悟りを体験し、次第に「見」が薄まっていくのを実感する。第四段階では、「今に至りて思へば」と回想しながら語るように、「見といふ病」は既になく、梅岩の意味した「無智なる性」を「知」る境地に到る。第五段階では、「存其心養其性。所以事天也。」、すなわち、「聖賢の地位」を目指しながら「私案なくして常に心明なる鏡の如く」（「存其心」）、「私案という私を以て本心の邪魔」（「養其性」）をしないように不断の努力に励む。以上の過程を通して、堵庵は自らの位相を深化させた。

堵庵が「此方の学問は本心を知らして其知た本心に違はぬばかりで何も煩多ことはござらぬ」や「学問の大意は此天理ばかりになる外はなし」と語るとき、彼の学問観は明白である。つまり、「本心を知る」ことと「本心を知る」ことで体認した「道」を日常生活の中で体現する（＝本心に背かぬようにする）ことが肝要とされるのである。堵庵の思想は「本心を知る」という体験と相即不離の関係にある。彼が説く本質的な倫理徳目、例えば「誠」「孝」「弟」を見ればそれは明らかである。ここで重要なのは、宗教体験の第五段階で確認したように、「敬以直内義以方外」、すなわち、日常生活の中で「本心を知る」という境地を究め、その境地に照らしながら日常の倫理実践を内省し続ける心のあり方であった。堵庵の思想（ならびに具体的な教化運動）は、その意味で、彼自身の宗教体験の内容とプロセスを言語化かつ具体化しようとする試みであったと言えよう。

排仏思想における二様のベクトル
――反仏教者の言説の再検討――

森　和也

排仏論者の仏教批判の力点の特徴から、近世における排仏論は、社会的、経済的、倫理的、科学的などに分類されているが、先行研究の多くは、これらの特徴を列挙するに止まっている。近世の時代的特質を考えた場合、仏教を徳川幕藩体制の一部に取り込んだ寺請制度の存在が、排仏論を主張する上で社会的前提となるであろう。排仏論が現実の社会と交差する時、当時の宗教制度に対する態度を積極的・消極的いずれにせよ明らかにせざるを得ない。この制度に対する態度を一つの基準として、社会的な〈制度〉と、制度には関わらない〈思想〉との相

NII-Electronic Library Service